お悔やみ

故マイク・メナカー（Michael Menaker）の思い出

本間　研一✉
北海道大学名誉教授、（財）アショフ・ホンマ記念財団理事長

2021 年 2 月 14 日（日曜）、私の友人であり、研究上の目標でもあったマイク・メナカー先生が逝去されました。87 年と 3 ヶ月の人生で、天寿を全うしたと言えないこともありませんが、彼を失ったことは私個人にとっても、世界の時間生物学にとっても大きな損失です。しかし、彼の功績と人となりは何時までも私たちの心に生き続けるでしょう。

マイク・メナカーをご存じない方も読まれていると思うので、彼の経歴を簡単にご紹介します。マイク・メナカーは 1934 年 5 月 19 日にオーストリア・ウィーンで米国市民として生まれました。いつだったか、マイクが「自分は米国大統領にはなれないンだ。」と意味ありげに話かけてきました。「大統領になるためには、米国内で生まれなければならないから。」と。その時は、なぜそんなことを云うのか不思議に思いましたが、理由を聞かずに過ぎてしまいました。彼は、1955 年スワースモア大学生物学科を卒業し、その年の 6 月にシャリー（Shirley）と結婚しています。彼女はその後、大学の管理運営ではマイクよりも才能を発揮し、数々の要職を務めましたが、マイクよりも先に亡くなっています。その後マイクは時間生物学の創始者の 1 人であるプリンストン大学のコリン・ピッテンドリック（Colin Pittendrigh）の研究室で大学院を修了し、コウモリの概日リズムの研究で 1960 年に博士号を得ています。彼は 1959 年から 1962 年まで、コウモリの飛行研究で有名なハーバード大学のドナルド・グリフィン（Donald Griffin）の研究室で博士研究員を務めました。その時期に彼は時間生物学では歴史的な会議として知られるコールド・スプリング・ハーバー・シンポジウム（1960 年）に参加しています。その後、彼はテキサス大学動物学講座の助教（Assistant Professor）となり、1979 年に教授に昇進しました。1969 年、マイクは、コールド・スプリング・ハーバー（米国）、フェルダフィング（西独）に続く時間生物学の分野で第 3 番目となる国際会議をワシントン州のフライディー・ハーバーで主宰しています。その後、オレゴン大学の神経科学研究所の所長を経て、1987 年バージニア大学生物学科の長（Chairman）に就任し、2020 年に退職するまで生物学教授として研究教育に従事しました。

マイクは、コウモリの概日リズムの研究から出発し、鳥や爬虫類の行動リズムが網膜を介さないで明暗サイクルに同調することを見出して、脳、松果体、眼球に概日振動体が存在することを示しました。彼が、学生であったジョウ・タカハシと明らかにした家すずめ（house sparrow）の行動リズムと松果体の役割に関する一連の論文は、ピッテンドリックの影響を強く受けているとはいえ、時間生物学の生理学的研究の頂点に立つものでした。1980 年代の終わりに、マイクはリズム周期を短縮する生物時計の変異動物（tau mutant hamster）を初めて見つけました。1986 年にハワイのホノルルで行われた日米科学セミナーで、そのことを初めて発表したマイクの講演は今でも印象に残っています。また彼は、視交叉上核以外にも概日時計が存在することを世界に先駆けて報告し、末梢時計の概念を確立しました。マイクは、我々の教室以外ではなかなか追試されなかったメタンフェタミンの行動リズムを再現し、視交叉上核外振動体の関与を支持してくれました。ただ、振動体の性質とそれに基づく命名については我々との間に意見の相違があり、決着がつく前に亡くなられたことは残念でした。マイクは、前述のジョウ・タカハシなど現在米国や欧州、日本で指導的立場にある多くの時間生物学者を、学生、博士研究員、共同研究者として育成し、今日の時間生物学研究の興隆に大いに貢献しました。彼は、師であるピッテンドリックとは異なってカリスマ的雰囲気は無く、親しみやすい人柄で誰にでも打ち解けていました。

私事になりますが、私が関係しているアショフ・ホンマ記念財団が主催する「生物リズムに関する札幌シ

✉ kenhonma2011@gmail.com

ンポジウム」の第1回会議は1984年に開催されましたが、その時国外から3名の研究者が参加しました。マイク・メナカーはその 1 人で、彼は 1984 年から 2000 まで「アショフ・ホンマ生物リズム賞」の国際選考委員会のメンバーとして、特に1997年からは委員会の座長として、札幌シンポジウムを盛り上げてくれました。ちなみに最初の選考委員会メンバーは、ユルゲン・アショフ（西独）、コリン・ピッテンドリック（米国）、ブライアン・フォレー（英国）、マイク・メナカー（米国）、ツトム・ヒロシゲ（日本）の5名で、錚々たるメンバーでした。第1回の受賞者がジョー・タカハシであったことは当然とはいえ、因縁めいたものを感じています。マイクは2009年、アショフ・ホンマ生物リズム名誉賞を受賞しました。写真は札幌シンポジウムで講演するマイクです。

マイクと最後にお会いしたのは2019年、フランスのリヨンで開催された欧州時間生物学会の時でした。大柄のマイクが背をかがめて、「Ya! Ken-ichi！How are you?」と声をかけてくれたのが見納めになりました。その時ふと思い出したのが、20 数年前同じリヨンで行われたヒューマン・フロンティアのシンポジウムの際に、メナカー夫妻、アショフ夫妻、車の運転した次男のアンドレアス、そして私の5人で郊外の農場にあるアラン・シャペルのレストランで食事をした時のことです。大いに食べ、大いに飲み、大いに語りました。アンドレアスと私以外はみな故人となっていますが、マイクとは良い思い出ばかりで、彼の姿と声は何時までも私の心にあります。

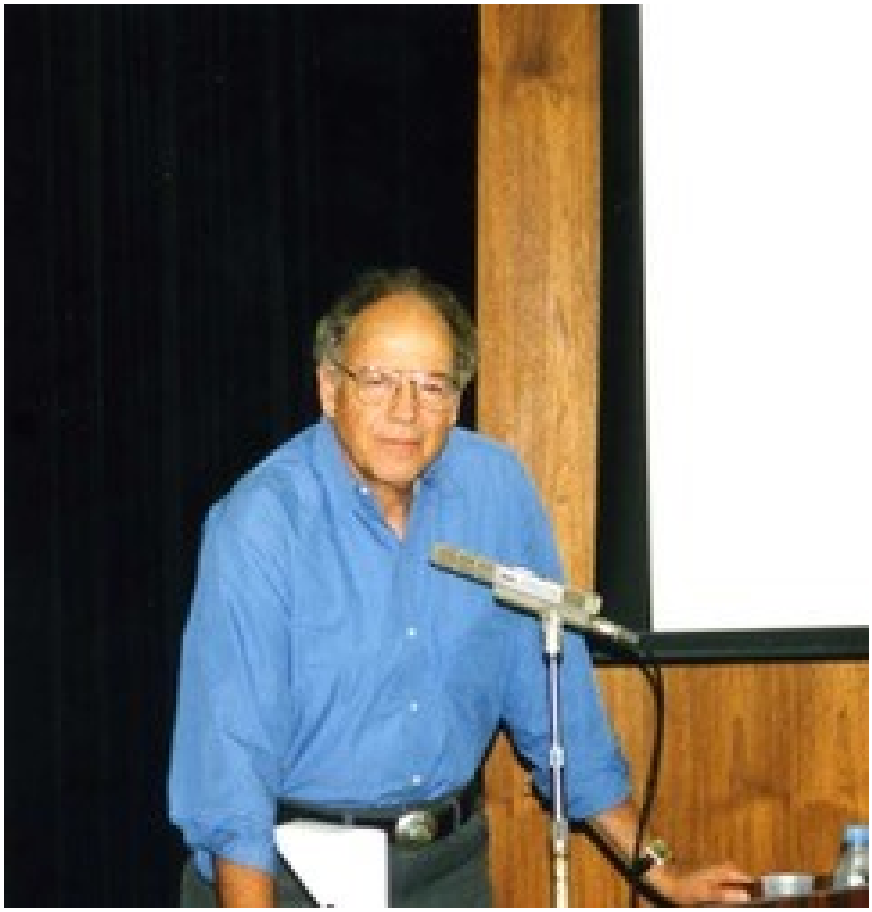

写真　札幌シンポジウムで講演するマイク